

# つらいことがあるのは、ぼくぐらいかと思つた

四年 森山 英一

ぼくは手や足が力サカサしていて、ひびわれてちがにじんだりすることもあります。ひふのあせの出るせんがびょうきなんだそうです。

ぼくはこのびょうきのために、今までいやなことがたくさんありました。ほいく園にはいるとき、ほかの子にうつるからと言って、ほいく園に入れてもうえませんでした。小学校に入つても、きゅう食で、ぼくがおかげをよそと「きたない」と言って、いやがられました。うんどう会で手をつなぐとき、いやがられたこともあります。ぼくは、三年生になるまで、友だちとあそんだことがありませんでした。

学校からかえると、バスにのつて、おかあさんの会社に行つてすゞしていました。

三年生になつて、理科で体のし組みをべん強しました。その時、「ひふのはたらき」というのがありました。その時、「ひふのはたらき」というのがありました。

ました。ひふには、きん肉をまもつたり、あつさやさむさをかんじたり、あせを出したりするはたらきがあるということをべん強しました。そして、あせが出ないとひふは力サカサして、ひびわれたりするということを先生が言いました。先生は、「森山さんは手がひびわれてほうたいをしてるけどふぶんなことはないですか。」

と聞きました。ぼくは、ズックがはきにくいことやはさみやえんぴつが持ちにくいことを話しました。すると先生は、

「では、いやだつたことはないですか。」

と聞きました。ぼくは、気持ちわるいつて言われたことや、ドッジにまぜてもらえなかつたことを言いました。ぼくは今まで、じゅぎよう中にはつぴょうしたことはありませんでした。この時はじめて、はつ

ぴょうしました。ぼくが言つたことを聞いて、みんなは

「これからはドッジをするとき、森山さんの前でボールをうけて、森山さんになげさせてあげたい。」と言つてくれました。この時からぼくは少しづつじゅぎょう中にはつぴょうするようになりました。

それから少しして、道とくの時間に「つらいことあるねんな」というお話をべんきょうしたとき、先生が

「みんなにもつらいこと、ありますか？ あつたら書いてください。」

と言いました。

ぼくは、「ぼくは友だちがいなから、時々学校に来るのがいやになることがい

あります。それにランチルームにもだれもさそつてくれないし、おとうさんがいないから、よるもおかあさんがしごとでいないときと、雨や雪がふつてながくつをはくと足がかゆいこと、それに人に、おまえの手、きたないとか気持ちわるいとか言われたときです。でも、おかあさんがそんなことにまけないようになると、いつもぼくの手をなでてくれるので、ぼくもつらいことがあつてもがんばります。」と書きました。みんなも書いていました。

ぜんいんが書いたとき、一人ひとりが書いたのを先生がプリントにして、いつしょによんでいきました。その中に、「おとうさんとおかあさんがけんかをし、おかあさんが出ていってしまいそう。」とか「おにいちゃんにいつもたたかれます。」というのがあつて、ぼくはびっくりしました。ぼくはおとうさんはいなけれど、おかあさんがぼくをとてもだいじにしてくれるので、しんじられませんでした。それにはぼくは一人っ子だから、きょうだいにたたかれることもありません。ほかにも、友だちにいやなことをされたり、言われたりしている子もいっぱい



ました。今まで、つらいことがあるのは、ぼくぐら  
いかと思っていました。でも、みんなほんとうにに  
つらいことがあるんだなと思いました。

ぼくの作文をよんで、ぼくに手紙をくれた子がい  
ました。その手紙には、「ぼくもそんなわる口を言  
われたことがあるよ。これから、おかあさんがいな  
いとき、日よう日か水よう日によんで。すぐあそび  
に行くから。ひとりぼつちじやなくなるよ。」と書  
いてありました。ぼくはとてもうれしかったです。

その手紙を書いてくれた木下さんのほかにもぼくの  
家にあそびに来てくれる子がいました。ぼくは、は  
じめて友だちを家によんであそぶようになりました。

せつ分でまめをまいた時、雪がふりました。次の  
日に、そのまめが雪でぎゅうっと大きくなつていま  
した。そのまめのようにぼくのむねはふくらんでいま  
した。学校からかえつてから友だちとあそべるから  
です。学校に行くのもとても楽しみでした。三年生  
はぼくにとつてさじょうに楽しかつたです。

ぼくは四年生になつて、きゅう食がかりになつて  
しまいました。手をあげないでいたら、それしかあ  
まってなかつたからです。ぼくは、きゅう食がかり  
になるのが心ぱいでした。それは、一年生の時によ  
うに、ぼくがくばつたものは食べたくないと言われ  
るかも知れないからです。ぼくが、心ぱいそうにし  
ていると、先生がぼくのひふのびよう氣のことをみ  
んなに話しました。そしてぼくが心ぱいしているこ  
とも言いました。そうすると、三年生の時同じクラ  
スだつたひら田さんが、

「じゃあ、かわつてあげる。」

としました。先生が

「どうする？かわつてもらう？」

と聞きました。ぼくは

「べつにかわらなくてもいい。」

としました。するとみんなが

「じゃあ、やればいい。」

と言つてくれました。ぼくは、一年生できゅう食が  
かりをしてからはじめて、きゅう食がかりになりま  
した。

## 考えましょう

- 1 はじめて先生からみんなの前で手足のことを聞かれた森山さんの気持ちを考えてみよう。
- 2 おかあさんがどんな思いで森山さんの手をなでてくれていたのか考えてみよう。
- 3 「みんなもつらいことあるんだな」と思ったときの森山さんの気持ちを考えてみよう。
- 4 きゅう食がかりになりそうになつたとき「かわらなくていい」と言つたり、「じゃあやればいい」と言われたときの森山さんの気持ちを考えてみよう。
- 5 みなさんも「つらいこと」はありませんかそのときのことをくわしく書きましょう。

# つらいことがあるのは、ぼくぐらいかと思つた（小学校中学年向け）

## A 教材設定の理由

子どもは、意地悪な言葉や、行為を受け続けることによって深く傷つき、学校にも行きたくないなるほどつらい思いになることがあります。

本教材に出てくる森山さんは、身体的な理由から友だちからいじめを受けていました。つらければつらいほど自分が本気で思っていることを人に言い出すのは難しいことですぐ、森山さんは授業の中でそのことを話しました。

クラスの友だちは、その心の深いところからの叫びに共感し、それぞの「つらかったこと」を書き始めます。クラスメートにとっても、一人ひとりの心の中にある重い事実を表に出すことは容易なことではありません。相手が心を開いて本当の気持ちを言つたときはじめて、安心して自分の心をさらすことができるのだと思います。

森山さんもみんなの「つらいこと」を聞いて、深い思いを共有し、気持ちが少しづつ満たされていくのを感じるので、そして勇気も湧いてきます。

心の中にしまわれているものの内容は、具体的には同じでなくとも深い思いを伝え合うことにより、心は通じ合い、支え合う仲間となることができると思います。そんな子どもどうしをつなぐ意図をもつた授業をつくりだしていきたいと思います。

## B 教材の解説

本教材は県内の小学校三年生から四年生にかけての、学級のできるとを題材にしています。

森山さんは皮膚の病気で手足が乾燥し、ひびわれて血がにじむなどの症状が幼い頃から続いていました。「他の子にうつるから」と保育園に入れてもららず、小学校でも給食係としておかげをよそと「きたない」と言われるなど、友だちからいやがれたり、さけられたりして、毎日つらい思いをしていました。

母親は学校に対し、クラスの状況を何とかしてほしいと申し入れました。だが、いじめはなくなることはありませんでした。

三年生になって新しい担任の先生は、本人と保護者とていて向かい合い話し合います。担任の先生は、理科の「体のしくみ」の授業の中で、森山さんの手足のことを正しく理解してもらうために、森山さんのことをとりあげます。そして授業の中で森山さんは体のことで「つらかったことを」はじめて発表します。それに対してクラスの子どもたちが自分がしてきた差別や、いじめに気づき、ドッジボールではボールを受けると手が痛くて受けられない森山さんに「ぼくがうけて、投げさせてあげる。」と返してくれます。

人権教育の教材である「つらいことあるねんな」（明治図書「いいかつ2年」）の授業をしたあと、みんなは自分の「つらいこと」についての作文を書きます。森山さんも自分のつらいことや、母の励ましについて書きますが、クラスの友だちもそれぞれが、家族とのいさかいや、友だちからのいじわるなどで悩みがあることを知ります。

そしてつらいのは自分だけでなく、他の人も心に秘めたいいろいろな思いがあるのだということに気づいていきます。

心の底にしまわっていた本当の思いが子どもたちの心に響き合い、互いの理解が深まっていきます。

その後森山さんの作文を読んで手紙をくれた子たちが家に遊びにきてくれるようになります。森山さんは学校に行くのが楽しみになり、つらくなりそうだった三年生が「最高に楽しい」ものになりました。四年生になつてふたたび給食係になりそうになつたとき、三年生の時クラスメートだった子が「代わってあげる」と申し出してくれましたが、森山さんは思いきつてそれを断り、一年生で給食係をして以来初めて給食係になります。まだ不安はあるけれど、勇気を出して一步をふみ出す気持ちになれたのです。

### C 支援の内容

- ①子どもたちの心が少しずつつながっていくには、お互いの思いをていねいに聞き、思いを伝えあうことが大切です。この事例の中でも森山さんは、心の底にしまわっていた本当の気持ちを話したり書いたりするたびに、クラスメートとの中で響き合うものがあることが読みとれます。そのような共感の積み重ねの中でお互いの理解が深まり、心がつながっていくのだということを気づかせたい。
- ②子どもたちの深い思いをていねいに友だちに返し、互いの思いをつなぐ機会にしたいと思います。それぞれの思いを受け止めることのできる仲間作りへと継続的なとりくみが必要です。

### D 参考資料

- ・ 第五十回全同教大会（一九九八年度）報告  
「ひらい」とあるのはぼくぐらいかと思つた
- 吉田詩弓（当時 金沢市立泉野小学校）

## E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	学習内容・支援の要領
<p>一 導入</p> <p>①みなさんは友だちに悪口を言われたりしたことはありますか。</p> <p>二 展開</p> <p>②「つらいことがあるのは、ぼくくらいかと思った」を読みましょう。</p> <p>③はじめて先生からみんなの前で手足のことを聞かれた森山さんの気持ちを考えてみよう。</p> <p>④お母さんがどんな思いで森山さんの手をなでてくれていたのか考えてみよう。</p> <p>⑤「みんなもつらいんだな」と思ったときの森山さんの気持ちを考えてみよう。</p> <p>⑥給食係になりそうになつたとき、「かわらなくてもない」と言つたり、「じゃあやればいい」と言われたときの森山さんの気持ちを考えてみよう。</p> <p>⑦みなさんも「つらい」とはありませんか。そのときのこととくわしく書きましょう。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑦言えない場合は書かせて、自分の思いを確かめたり、一人ひとりの気持ちを交流する機会を設けたい。</p>	<p>①あればそのときの気持ちを数人に発表させる。</p> <p>②黙読させた後に範読し、時間的経過にそつた場面をおさえさせる。</p> <p>③「じきじきしたと思う」「不安な気持ちがあつたと思う」などの答えが予想されるが、その理由として今までいじめられていたことで、自分の気持ちを理解してもらえないかも知れないとの不安があつたことをおさえる。</p> <p>④友だちや家のことでさみしさやつらさを抱えこんでいた息子に対して、親としてそれを少しでもやわらげ、支えたいという母の深い愛情に気づかせたい。</p> <p>⑤つらい思いをしていたのは自分だけではないと気づいただけでなく、一人ひとりの心の痛さに共感し、相手の痛みを自分のこととして感じていることに気づかせたい。</p> <p>⑥勇気を持って受けようという気持ちやそれをみんなが認めてくれときの安心感に気づかせたい。</p>